

吉良城跡 IV

1988・3

高知県吾川郡春野町教育委員会

吉 良 城 跡 IV

1988・3

高知県吾川郡春野町教育委員会

序

本調査は、昭和59年度から5ヶ年計画で国及び県の補助とご援助ご協力を得て実施してきたものであります。

山頂部分の発掘調査を第一年次に実施して翌年度からは、屋敷跡と推考される区域へ移動して以来今まで3年間、発掘調査を継続実施してきました。

本年度は、前年度調査に引き続き「土居ノ谷」において貴重な遺構が確認された調査区の東側隣接区（第一区）を調査の中心にし、北西部の薬師堂周辺（第二区）をも調査の対象として発掘調査を実施しました。

調査対象区のうち、第一区においては生育した立派な柿園であることから、地権者的小島操氏には多大のご協力とご配慮をいただき、貴重な遺物及び重要な遺構等を得ることができました。

第二区においては、地権者である松田博夫氏、松田弘美氏のお二人からは物心両面にわたる暖かいご配慮とご協力をいただき、本発掘調査が極めて円滑に推進できましたことを改めて感謝いたします。

今回の発掘調査は、中世城跡「吉良城跡発掘調査」の核心に触れる重要な時期と位置づけ実施をしたものであり、多数の成果を収めることができたと考えているところであり、調査結果については専門家の方々の報告書にまとめていただき、これらを総合的にまとめたうえで史跡の保存と管理計画を今後の課題とさせていただきたいと考えていますので、引き続きご指導・ご援助をお願いする次第であります。

おわりに、発掘調査にあたり終始適切なご指導・ご助言をいただきました岡本健児先生並びに高知県文化振興課の皆様方には心から厚くお礼を申し上げ序といたします。

昭和63年3月31日

春野町教育長 小嶋正隆

例　　言

1. 本書は、春野町教育委員会が国・県の補助を受けて昭和62年度に実施した吉良城跡発掘調査の概要報告である。
2. 調査は、春野町教育委員会が主体となり、高知県教育委員会の指導を得て実施した。なお、発掘調査は高知県教育委員会文化振興課主幹山本哲也・主事松田直則が担当した。また、調査顧問岡本健児高松短期大学教授から、調査全般にわたって指導を得た。
3. 本書で使用した図面のうち、第1図は国土地理院発行2万5千分の1(ごめんN I-53-28-7-2)を使用し、第2図は1万分の1高知広域都市計画図(春野町)を、また第3図は高知県作成2,500分の1地図(高知広域都市圏73)を複製使用したものであり、方位は方眼北(G,N)とした。また、第4図は『高知県春野町 中世の城跡』から転用したものである。
4. 造構実測図等のレベル高は海拔高度で、単位はメートルによるものである。また、遺物実測図は寸縮尺に統一した。
5. 本書の執筆は、IV 3を松田直則が、他は山本哲也が分担し、編集は山本哲也・松田直則が担当した。
6. 今回の発掘調査を通じて、地権者及び地元関係者をはじめ多くの方々の御協力をいただいた。関係者各位に厚くお礼申し上げたい。
7. 春野町文化財専門員で町文化財保護審議会委員であった山脇正寛氏は、昭和62年9月18日に他界された。吉良城跡発掘調査では第1次調査から参加され、第4次調査として行われた本年度の調査にも参加を希望されていた。本城跡発掘調査の進展を見守られ、終始暖かい心遣いを寄せられた故山脇正寛氏の突然の訃報に、深く哀悼の意を捧げるとともに、御冥福を心からお祈り申しあげたい。

(発掘調査体制)

團長 小鳴正隆(春野町教育長)
副團長 池上孝雄(春野町教育委員会社会教育課長)
主任調査員 山本哲也(高知県教育委員会文化振興課主幹)
調査員 松田直則(＊＊＊主事)
顧問 岡本健児(高松短期大学教授)
総務 近澤潤(春野町教育委員会社会教育課・同和教育指導係長)
春野町文化財保護審議会
春野町文化財友の会

本 文 目 次

序

例 言

I 調査にいたる経緯	1
II 吉良城跡の概要	1
III 調査の方法と経過	7
IV 調査の概要	9
1 調査の内容	9
(1) 土居ノ谷地区	9
(2) 大谷地区	9
2 検出遺構	13
3 出土遺物	18
V まとめ	22

挿 図 目 次

- | | |
|---------------------|--------------------------|
| 図 1 吉良城跡位置図 | 図 7 トレンチ設定図（大谷地区） |
| 図 2 吉良城跡周辺図 | 図 8 トレンチ断面図 |
| 図 3 吉良城跡概要図 | 図 9 土居ノ谷地区遺構平面図 |
| 図 4 土居復元図 | 図10 土居ノ谷地区遺構検出状態図（Mトレンチ） |
| 図 5 調査地点位置図 | 図11 出土遺物実測図 |
| 図 6 トレンチ設定図（土居ノ谷地区） | |

図 版 目 次

- PL. 1 大谷地区遠景（北東から）
大谷地区調査地近景（調査前・北から）
- PL. 2 大谷地区調査地 伐採作業風景（北から）
同 上
- PL. 3 大谷地区 トレンチ設定状況（A～Cトレンチ・北から）
同 上（南東から）
- PL. 4 大谷地区 トレンチ設定状況（Dトレンチ・西から）
同 上
- PL. 5 大谷地区 トレンチ設定状況（Cトレンチ・北東から）
同 上（南西から）
- PL. 6 大谷地区トレンチ設定状況（Aトレンチ・西から）
同 上（Bトレンチ西から）
- PL. 7 土居ノ谷地区 トレンチ設定状況（Mトレンチ・南から）
土居ノ谷地区遺構検出状態（西から）
- PL. 8 Mトレンチ遺構検出状態（北東から）
同 上（南西から）
- PL. 9 Mトレンチ遺構検出状態（西から）
完掘状態（西から）
- PL. 10 トレンチ土層堆積状態（南から）
トレンチ東側遺構検出状態（北西から）
- PL. 11 出土遺物（土師質土器）
- PL. 12 出土遺物（青磁・白磁・染付）

I 調査にいたる経緯

吉良城跡は、春野町弘岡上古城4360番地外に所在する中世の山城である。この城跡は、戦国時代土佐の七守護の一豪族であった吉良氏の居城であり、「吉良ヶ峰城」として吉良氏の興亡と共に語り継がれている城跡である。

昭和35年には町の史跡に指定され、また昭和52年には城跡の一部について公有化が図られるなど保存措置が講じられており、土佐の戦国時代史を飾る著名な城跡として本城跡への関心も高く、訪れる見学者も多い。昭和59年度からは、今後の史跡の保存方策を検討するための適切な資料を得ることを目的とした発掘調査が実施され、これまでに3次にわたる調査が行われている。

今回の発掘調査は、吉良城跡の第4次調査として実施されたもので、昭和61年度の第3次調査において吉良氏屋敷跡の一部であると考えられる遺構が検出された「土居ノ谷」地区の隣接地及び威徳院跡が所存すると推測されている「大谷」地区的薬師堂周辺について調査が行われた。

調査対象地は柿・密柑等の果樹園となっており、特に「土居ノ谷」地区については柿樹の一部除去が必要となるなどの困難な調査条件下であったが、地権者の小島操、均・松田博夫氏の深い御理解と御協力を得て、昭和62年11月9日から11月17日まで「大谷」地区的調査を、また12月7日から12月18日までの間に「土居ノ谷」地区的調査を実施し、調査終了後に埋め戻し作業を行って総ての調査を終了することができた。

II 吉良城跡の概要

1. 吉良城跡

城跡は、標高249mの吉良ヶ峰から南東へ派生した丘陵上に築かれている。丘陵頂部には、東西方向の空堀（南堀切）によって二分された平坦面がみられ、北側の平坦面は北嶺（標高111.2m前後）、南側は南嶺（標高115.4m前後）と呼称されている。

北嶺の北側には二段の郭（北の段）がみられ、北側尾根部とは総数5条からなる堀切（北堀切）によって区切られている。また、北嶺の東側に接して帯状の郭（東の段）があり、その東側下方には2条の堀切が所在している（東堀切）。北嶺の南端部には小規模な台状地形が、また南側下方には陸橋上の平坦地形（南の段）がある。南嶺の北東部には、二段の郭（北の段）が、また北西部には三段の舌状郭及び総数5条の堀切がみられる。北嶺は南北40m東西20mを測り、南嶺は南北46m東西6～9mを測る平坦面である。また、北嶺と南嶺とでは、南嶺が僅かに高い。

城跡の詰は北嶺にあり、吉良城跡の第1次調査（昭和59年度）では、詰北端部及び詰周囲において柱穴状のピット群等が検出されている。柱穴状のピット群が遺存することから、内容は不明確ではあるが、詰部において掘立柱建物跡等が所在していたことが明らかである。（図3）
(1)



第1図 吉良城跡位置図

2. 土居と土居周辺

土居ノ谷

城跡の所在する丘陵の西側谷部には、「土居」の地名をもつ土地が所在する。春野町弘岡上字土居ノ谷1225~1228・1231~1233番地に該当するもので、現在、田・畠・山林及び雑種地になっている。土居ノ谷は、両側を丘陵部ではさまれた谷部で、四段からなる平坦な段状地形を呈している。

土地の小字名に「土居」の名称が冠せられていることから、「長宗我部地検帳」に記載されている「御土居」の所在地として推測され、吉良氏屋敷跡であると伝えられてきた。吉良城跡の第2次調査（昭和60年度）では、土居ノ谷の谷入口部が調査され、戦国時代に属する輸入陶磁器等が出土して、発掘区の周辺に遺構が形成されていることがうかがわれた。⁽²⁾

第3次調査（昭和61年度）において、土居ノ谷の谷奥部を調査したところ、吉良氏屋敷跡の一部であると考えられる遺構（石垣遺構・石組遺構・土壘状遺構・柱穴）が検出され、土居ノ谷が城跡の土居であることが明らかとなった。⁽³⁾

大谷

土居ノ谷の西側谷部には、「大谷」の小字名をもつ土地が所在している。春野町弘岡上字大谷1270番地外に該当するもので、現在、畠・山林・雑種地となっている。

大谷地区には、土師質土器片・備前焼壺・擂鉢片・近世陶磁器片が散布しており、また、「長宗我部地検帳」では、屋敷跡等の記載がみられることから、家臣団屋敷跡・光蓮寺跡・威徳院跡、上・中・下の寺坊の所在が推測されている。

第3次調査では、薬師堂の南側平坦地が調査され、細片の土師質土器片・茶臼が出土した。調査対象地は、威徳院跡と推測されている場所であり、遺構は検出されなかったものの、発掘区の周辺に遺構が形成されている可能性がうかがわれた。⁽⁴⁾

今回の調査では、第3次調査と同時に遺構は検出されなかったが、土師質土器片・青磁片が出土し、戦国時代に属する遺物が散布していることが確認された。第3次及び第4次調査において出土した遺物は、城詰部及び土居ノ谷地区の出土遺物と同じく15世紀後半~16世紀中葉に所属時期が求められるもので、大谷地区においても吉良城跡関連の屋敷跡等が存在していた可能性は強い。（図4）

註1 「吉良城跡Ⅰ」「高知県春野町 中世の城跡」 春野町教育委員会 1985年

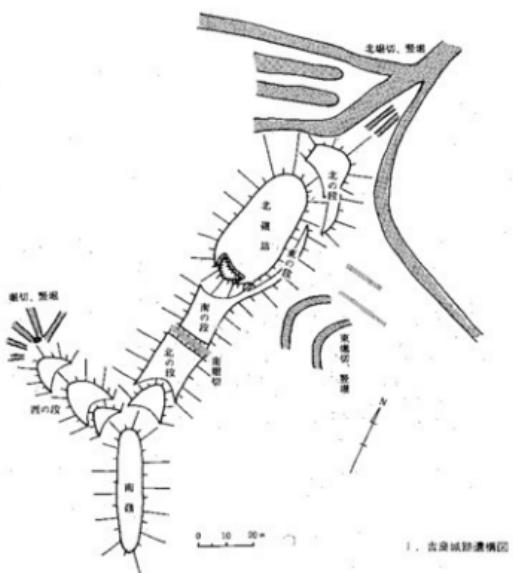
2 「吉良城跡Ⅱ」 春野町教育委員会 1986年

3 「吉良城跡Ⅲ」 春野町教育委員会 1987年

4 註3と同じ



第2図 吉良城跡周辺図

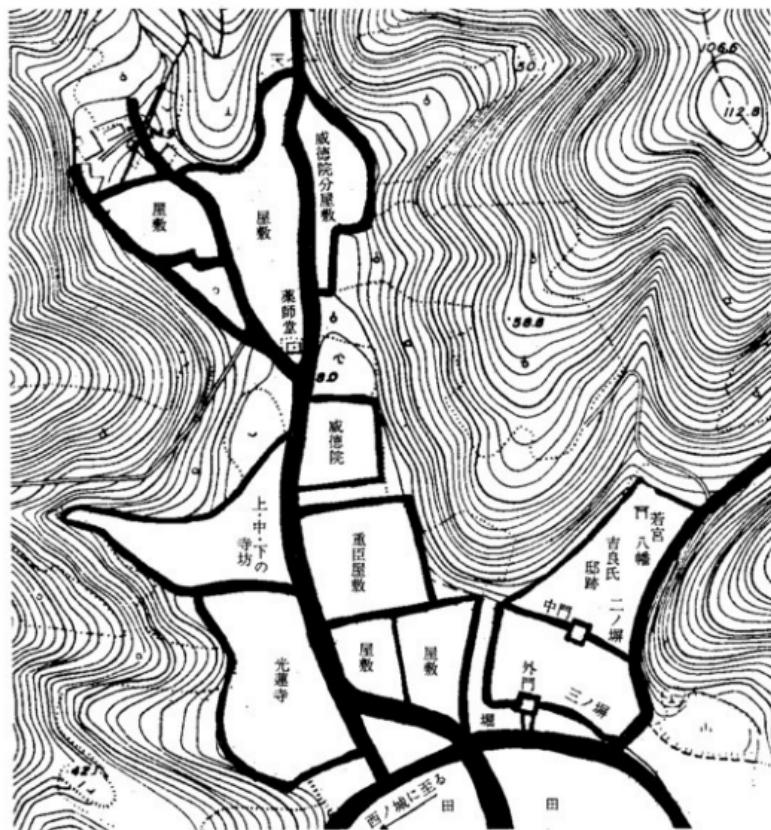


1. 吉良城跡遺構図



2. 北側（西）遺構平面図

第3図 吉良城跡概要図



『長宗我部地検帳』の記載に基づく吉良城跡の山下図。

小島祐馬博士の復元によるもので、地検帳の内容及び土地の地名簿から、土居及び家臣團の屋敷跡、寺院跡等の所在地を推定された。

上図のなかで、吉良氏邸跡は「土居ノ谷」地区に、屋敷及び威徳院等は「大谷」地区に位置している。

第4図 土居復元図

III 調査の方法と経過

発掘調査対象地は、春野町弘岡上土居ノ谷及び大谷で、吉良城跡の西麓にあたる谷部である。調査区は、土地の小字名を使用して「土居ノ谷」及び「大谷」地区に区分することとした。

土居ノ谷地区

「土居ノ谷」の西側谷奥部で、行政地番は春野町弘岡上1229番地である。土地の総面積は、約2,000m²で現状は柿畠となっている。第3次調査の対象地である段状の畠地とは、南北方向の小排水路を隔てて接しており、やや東に傾斜する平坦地形を呈している。

調査対象地の標高は、15.90m前後を測り、西側の段状地とは50~70cm前後の比高差で低くなっている。土地は現在、柿畠として利用されていることもあり、ごく部分的な発掘区を設定せざるを得なかった。発掘調査面積は、約16m²である。

調査は、柿樹を除去した後、重機を使用して表土及び耕作土を除去したうえ、人力で遺構及び遺物包含層の検出を行った。なお、測量調査は昭和60年度の第2次調査時に設定された測量杭(標高14.92m)を基本杭とし、新たに調査用の新設点を設けた。

検出遺構については、縮尺 $\frac{1}{50}$ の遺構平面図を作成し、他に土層断面図(縮尺 $\frac{1}{50}$)、地形測量図(縮尺 $\frac{1}{250}$)を作成した。

発掘調査は、昭和62年12月7日から12月18日までの12日間で、12月18日に埋め戻し作業を実施し、総ての調査を終了した。(図5・6)

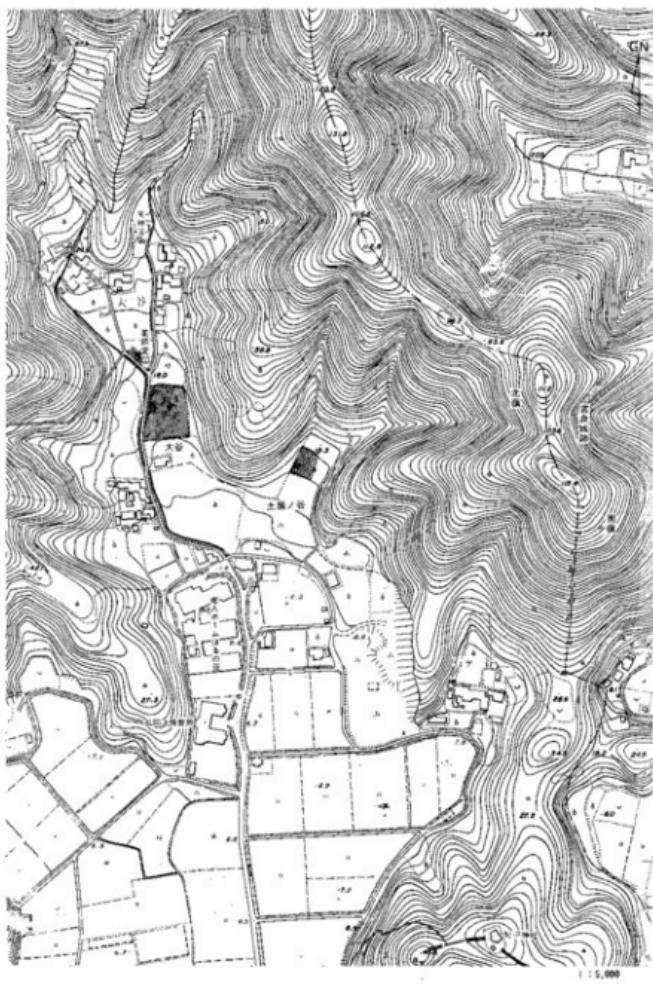
大谷地区

調査対象地は、「大谷」の谷奥部に位置する平坦地である。行政地番は春野町弘岡上大谷1270番地及び1250番地である。発掘区は、薬師堂の北裏部に1ヶ所と、第3次調査の対象地の南側に3ヶ所設定した。

調査は、地形に併せて任意にトレンチを設け、発掘区の区分をするためにA~Dまでの名称で各トレンチを呼称することとした。A~Cトレンチの設定箇所については、竹林を伐採したうえ、重機を使用して表土等を除去した後、人力によって遺構及び遺物包含層の確認作業を行った。また、Bトレンチについては、土層堆積状況を確認するために部分的に地表下約1.8mまで掘削した。

測量調査は、薬師堂南側において第3次調査時に設定した基準点(標高17.993m)を基に、測量用の杭を新たに設け、土層断面図(縮尺 $\frac{1}{50}$)及び地形測量図(縮尺 $\frac{1}{250}$)を作成した。

発掘調査は、昭和62年11月9日から11月17日までの9日間で、調査後に埋め戻し作業を実施した。総発掘面積は127m²である。(図5・7)



第5図 調査地点位置図

IV 調査の概要

1. 調査の内容

(1) 土居ノ谷地区(図6)

第3次調査で設定した発掘区のうち、Aトレンチからは石垣遺構、柱穴群、石組遺構等が検出されて、中世の具体的な遺構が確認された。今回の調査では、Aトレンチで検出された遺構の広がりを確認するために、Aトレンチ東側に発掘区を設定して調査を実施した。なお、発掘区は第3次調査時におけるトレンチ名を統けて、Mトレンチを呼称することとした。

Mトレンチ

土居ノ谷地区の西側谷奥部に設けた発掘区で、3.6m画の発掘区である。基本層序は、第1層表土で茶色粘礫土、第1'層暗褐色粘礫土、第1''層淡茶色粘土、第2層茶褐色粘礫土、第2'層黄茶褐色粘礫土、第3層灰色粘礫土、第4層茶褐色粘礫土、第5層黄茶褐色粘礫土、第6層褐色粘礫土、第7層黒褐色土で、第7層下は地山(岩壁)となっている。

第1層～第2層は耕作による影響を強く受けており、若干の中世の遺物(土師質土器片)と共に、近現代に属する陶磁器片が出土した。第2'層から第6層にかけて、青磁・土師質土器等が出土し、なかでも第5層及び第6層中からの遺物の出土量が多かった。

柱穴及びピットは、第6層及び第7層上面から形成されたもので、黄褐色土・褐色砂礫土、茶色粘礫土等が堆積していた。

(2) 大谷地区(図7)

大谷地区については、薬師堂の北裏及び第3次調査において設定した1～4トレンチ南側に発掘区を設けて調査を実施した。各トレンチの調査内容をまとめて、調査の概要にふれることにしたい。

Aトレンチ

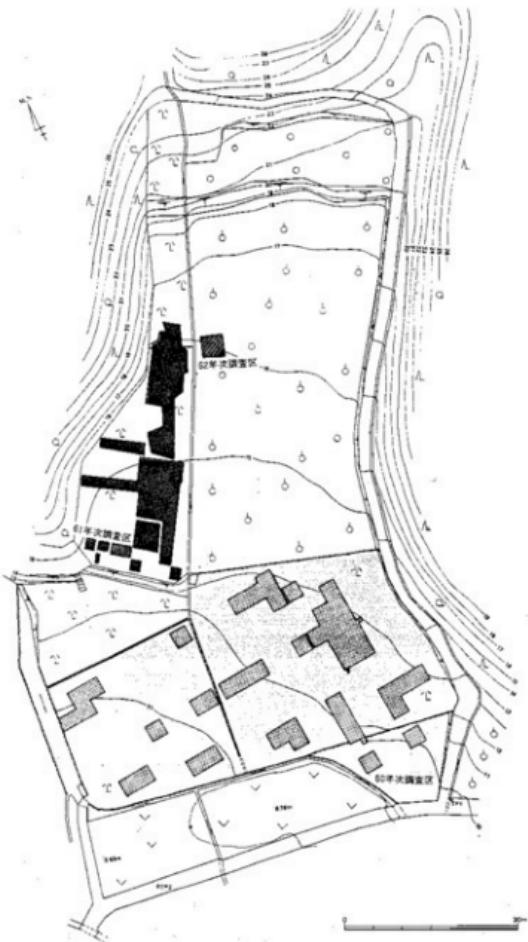
第3次調査の調査対象地の南側下段に設定した発掘区で、幅2.5m長さ3.5mの発掘区である。表土下4層に区分される堆積土が確認され、第3層暗褐色粘礫土から土師質土器の細片が出土した。

Bトレンチ

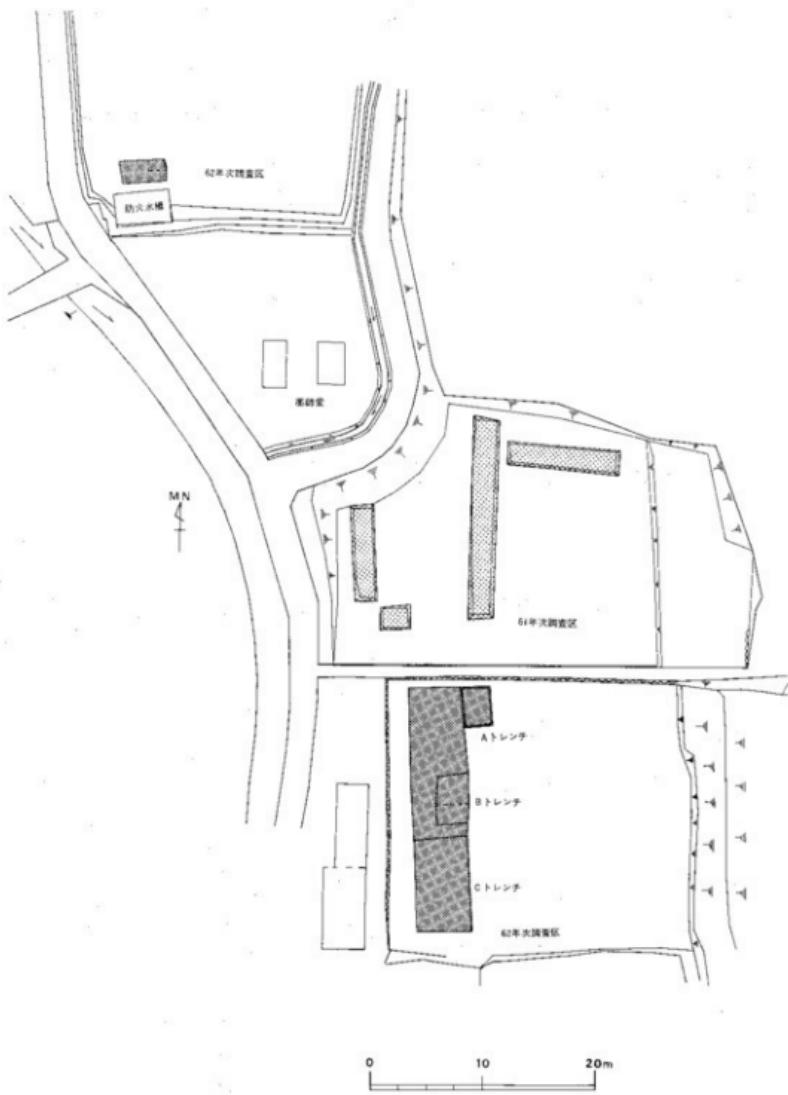
幅5m長さ14mの南北方向の発掘区で、部分的に表土下1.8mまで掘り下げた。基本層序は、第1層表土で暗褐色腐植土、第2層茶褐色粘礫土、第3層暗褐色粘礫土(黄色砂礫土を含む)、第3'層暗褐色粘礫土(礫を多量に含む)、第4層褐色粘礫土、第5層黄褐色粘礫土で、第3層から土師質土器片・青磁片が出土した。

Cトレンチ

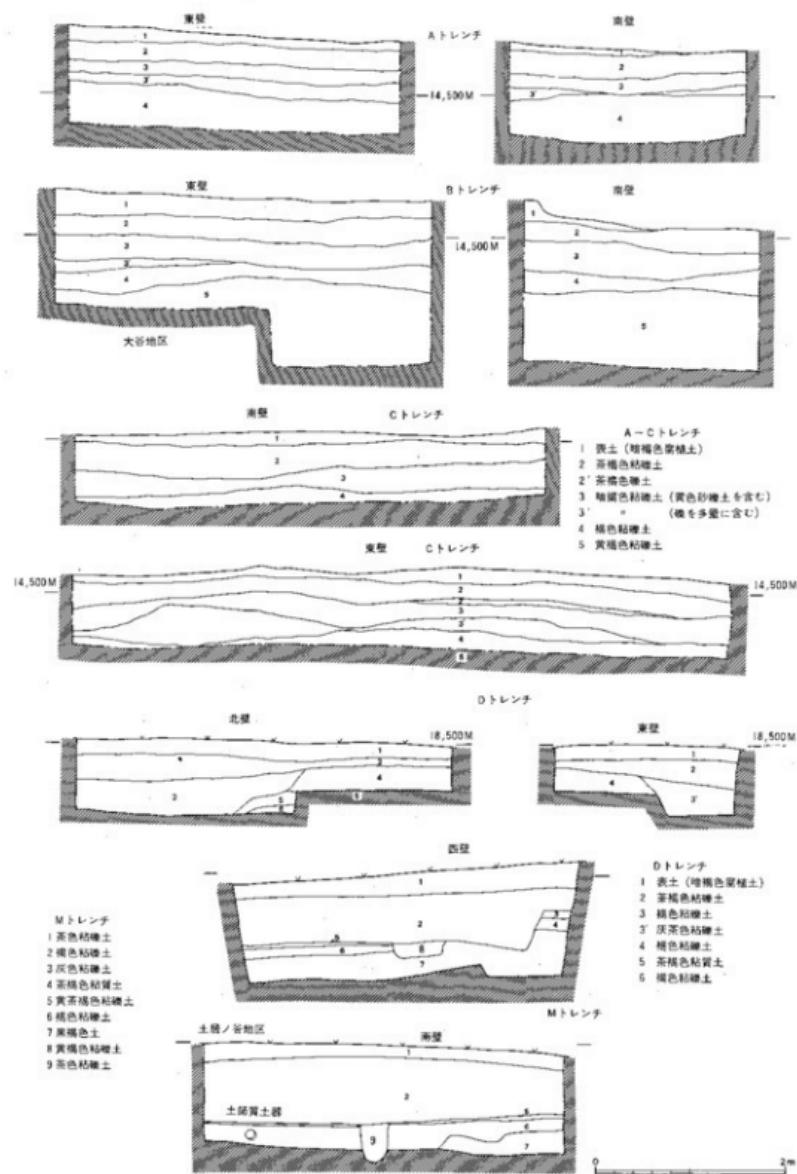
Bトレンチに続く南北方向の発掘区で、幅5m長さ8mのトレンチである。基本層序は、Bトレンチ内の堆積土と同様であるが、第2層茶褐色粘礫土下に第2'層茶褐色礫土が堆積していた。



第6図 トレンチ設定図（土居ノ谷地区）



第7図 トレンチ設定図(大谷地区)



第8図 トレンチ断面図

第3層及び第3'層から、土師質土器片及び青磁が出土した。

Aトレンチ～Cトレンチにおいては、遺構は検出されなかったものの、第3層中から戦国時代に属する遺物（土師質土器及び青磁）が出土し、発掘区周辺に遺構が存在している可能性が推測される。

Dトレンチ

薬師堂の北裏に設定した幅2m長さ4mの東西方向の発掘区である。表土下6層に区分される堆積土が認められ、基本層序は第1層表土で暗褐色腐植土、第2層茶褐色粘礫土、第3層褐色粘礫土、第3'層灰茶色粘礫土、第4層褐色粘礫土、第5層茶褐色粘質土、第6層褐色粘礫土である。なお、第1層～第3'層は、近現代のカク乱土である。第5層及び第6層は、南西方向へ傾斜して堆積していた。発掘区周辺は、大谷地区のなかでも比較的小高い舌状地形の先端部に位置しており、遺構等の存在が推測されていたが、遺物包含層及び遺構は検出されなかった。

なお、大谷地区の谷奥部については、土師質土器の細片及び備前焼壺片等が散布しており、A～Cトレンチから中世の遺物が出土したことからみても、屋敷跡等の具体的な遺構が所在していることが考えられる。

2. 検出遺構（図10）

土居ノ谷地区に設定したMトレンチから、柱穴及びピットが検出され、掘立柱建物跡の一部を確認することができた。

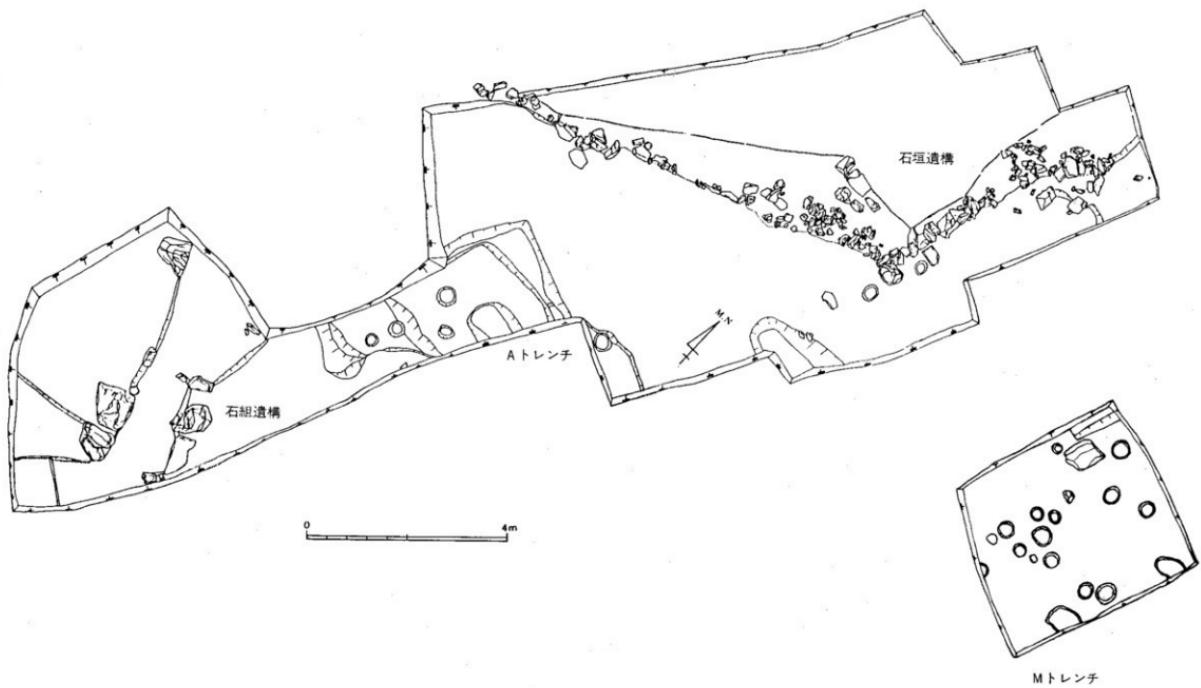
遺構は、第6層褐色粘礫土及び第7層黒褐色土上面で検出され、すくなくとも二時期にわたる遺構形成が認められた。第3次調査のAトレンチからは、同様な柱穴及びピットが検出されており、今回検出された遺構と関連するものであると判断される。

柱穴及びピット

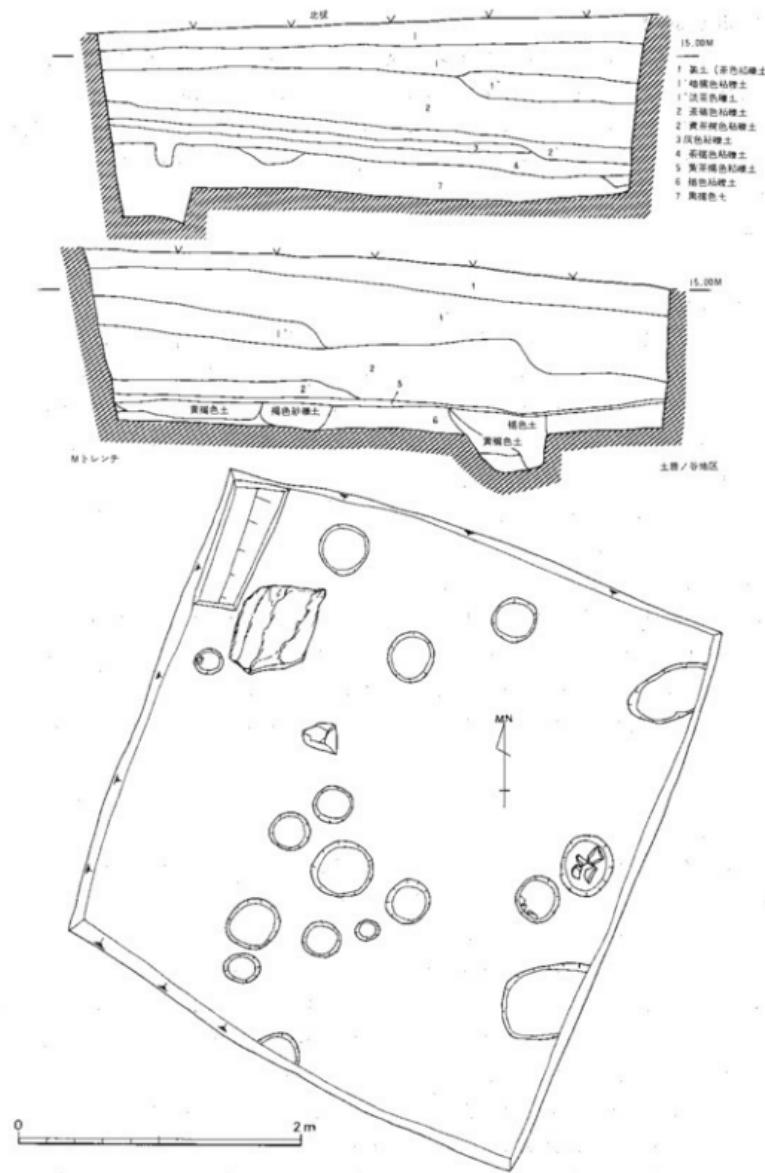
発掘区が限定されているため、面的な把握は困難であったが、柱穴跡又は柵址の一部と考えられる。直径26～28cm深さ11～20cm、直径34～36cm深さ12～20cm、直径14～16cm深さ9～12cm前後の三群に大別することが可能で、直径26～36cm前後のものは柱穴跡に、また直径14～16cm前後のピットは柵址等の一部であるものと考えられる。

第3次調査のAトレンチで検出された柱穴は、直径25～35cm、深さ14～30cmを測るもので、今回検出された柱穴跡と類似している。

柱穴及びピットの一部からは、青磁片・土師質土器片・備前焼壺片等が出土した。また、柱穴のうち、トレンチ東壁及び南壁ぎわで検出されたものは第6層上面で検出され、その他の柱穴及びピットは第7層上面で検出された。なお、Aトレンチの柱穴跡検出面とMトレンチの検出面との比高差は約1.50mを測り、Mトレンチ側が低くなっている。



第9図 土居ノ谷地区遺構平面図



第10図 土居ノ谷地区造構検出状態図 (Mトレンチ)

3. 出土遺物

今回の4次調査は、大谷地区及び土居ノ谷地区を中心に実施された。両地区的遺物出土状況としては、大谷地区は、第3層の流入土からの出土が大半であるが、量的には少ない。土居ノ谷地区は、ピット及び第4層の包含層出土である。遺物の概要是、土師質土器、輸入陶磁器、備前焼が主流である。包含量出土のものが大半を占めるため、ここでは種類、器種ごとに以下説明を加えることとする。7・11・12・19・20が大谷地区出土で、その他はすべて土居ノ谷地区である。(図11)

土師質土器

1・2は小皿である。1は、土居ノ谷地区P1出土で口径7.3cm、器高1.5cm、底径4.0を測る。体部は直線的に外上方に短く立ち上がる。ロクロ成形と考えられるが、全体的に摩耗が著しく調整は不明である。3の杯と併出している。2は1と同様な形態を呈するが、全体的に摩耗が著しい。口径7.4cm、器高1.7cm、底径4.5cmを測る。3・4は杯である。3は口径12.3cm、器高3.2cm、底径6.2cmを測る。体部は直線的に外上方に立ち上がる形態である。4は口縁部が欠損しているが、同様な形態を呈すると考えられる。小皿・杯は、すべて胎土が軟質で、焼成も悪いため摩耗が著しい。底部の糸切り痕跡も確認できないが、成形はロクロによるものと考えられる。杯の特徴的な点は、口径に比して底径の広い点があげられる。色調は浅黄橙色を呈する。5・6は鍋である。口縁破片のため法量等不明であるが、胴部にタタキを有する本県で比較的多く出土する特徴的な鍋である。口縁部は内外面ヨコナデで、突堤下はタタキが施され、煤が付着する。5は突堤のみを貼付しているが、6は口縁部も含め貼付し成形している相違点が認められる。7は土師質土器の釜である。細片で全体的に摩耗が著しく不明な点が多いが、土師質の釜の出土例は稀少である。

輸入陶磁器

青磁・染付・白磁が出土している。土居ノ谷地区で染付が多く出土している。8～10は青磁の皿である。8は口径10.7cm、器高2.7cm、高台径5.0cmを測る。高台の一部が欠損しているため明確でないが、高台内面までオリーブ灰色釉がかかる。内外面に貫入がはいる。口縁端部は稜花ではなく丸みを有する。9は稜花皿である。推定であるが、口径13.2cmを測る。内外面に貫入がはいる。10は底部破片であるが、皿と考えられる。復元高台径6.0cmを測る。見込みに凹線及び印花文が施され、外底は蛇目状釉ハギである。オリーブ灰色釉で、内外面に貫入がはいる。11～13は碗である。11は底部破片であるが、オリーブ灰色釉が高台をのりこえ内面まで施される。外底は無釉であるが、蛇目状釉ハギの可能性もある。12は見込みに印花文、外底は蛇目状釉ハギで縦釉である。露胎部は一部赤色化している。暗青緑色釉が厚くかかり、貫入は認められない。底径5.9cm、残存高2.6cmを測る。13は口縁部破片であるが、復元口径15.1cmを測る。口縁部外面に雷

文帯、体部にヘラ描蕉弁文が施される。オリーブ灰色釉で、貫入は認められない。14は盤である。外底は蛇ノ目状釉ハギで、露胎部分は赤色化している。オリーブ灰色の厚い釉が施され、内外面に貫入がはいる。

15～17は染付である。15は皿で葵筋底を呈する。外底は露胎で赤色化している。口縁部が欠損しているが、文様構成は口縁部が波濤文と考えられ、底部は芭蕉葉文が描かれる。見込は、一条の界線中に文様があるが不明である。内外面は貫入がはいる。16・17は碗である。16は復元口径13.5cmを測り、形態は内湾気味に外上方に立ち上がる。外面は、口縁部で2条の界線中に波濤文、体部は蓮弧状の唐草文が描かれる。内面は、口縁部に一条の界線が施されるのみである。17は口縁部外面に雷文帯、体部は草花文が描かれる。

18は、白磁の口縁部端反りの皿である。白磁の出土する割合は少なく、今次調査では1個体分のみである。

国内産陶器

今次調査は、調査範囲が狭く、備前焼の擂鉢・甕しか出土していない。19・20は擂鉢である。19は、口縁端部が上下に肥厚し、体部は直線的に外上方に立ち上がり、復元口径27.3cmを測る。内外面ロクロナデで、条線の単位は不明である。20は、口縁端部が上方に肥厚し、外面に2本の凹線が施される。内外面ロクロナデ。21は甕で、玉縁口縁を呈する。土居ノ谷地区のP2出土である。

小 緒

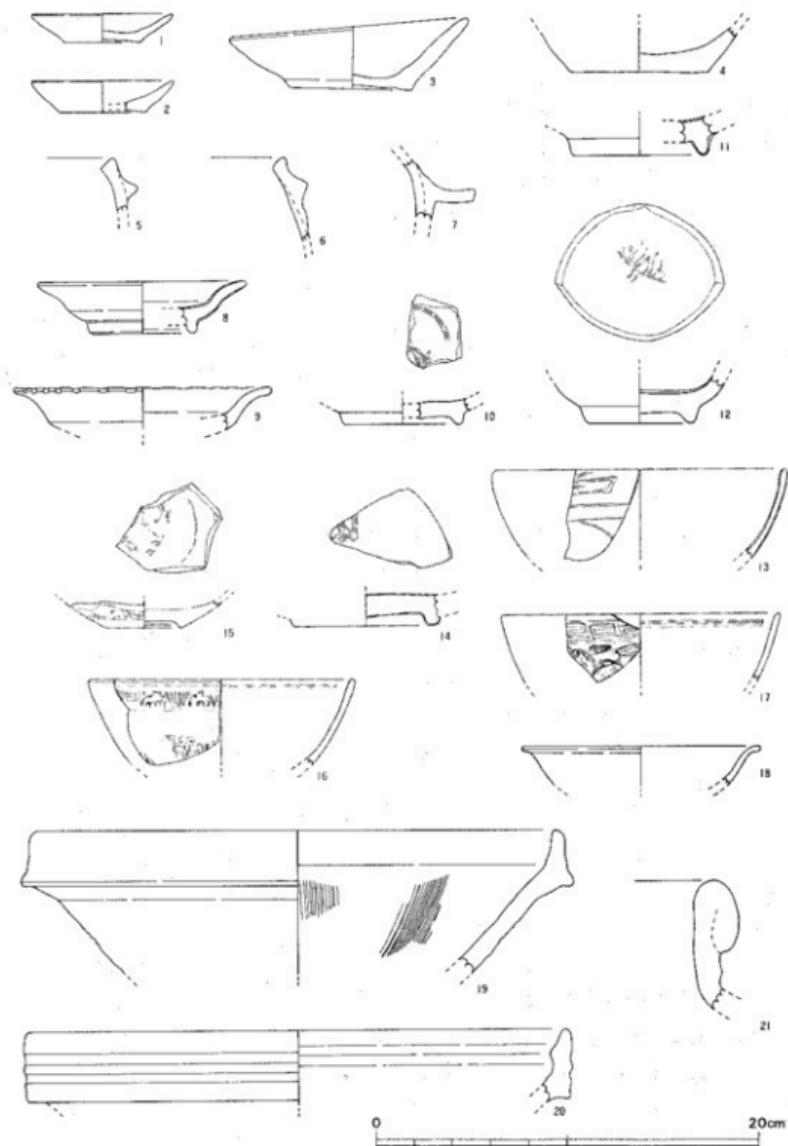
今次の調査は、大谷地区、土居ノ谷地区共に調査範囲が狭く、出土遺物量も少なかった。遺構出土のものは、土師質土器の1・3が土居ノ谷地区のP1より共伴しているのみである。全体的に包含層出土のものが大半であるが、ここでは主に土師質土器を中心に若干の考察を加え、まとめとしたい。

土師質土器の特徴としては、全体的に胎土が軟質で摩耗が著しいことと、また、ロクロ成形によるものが多いという点である。1次から3次調査出土の土師質土器を概観してみると、成形、形態、胎土、焼成にほぼ共通した特徴が認められ、土器製作における画一化が考えられる。器種構成としては、杯と小皿が存在するようであり、比較的多量に出土している3次調査の内容をみても伺い知ることができる。また、今次調査の土居ノ谷地区P1でも同様な器種が共伴している。杯の特徴を抽出するとすれば、形態の差が若干認められる点であり、底径の広いもので6～7cm、狭いもので4～5cmのものが存在する。ここでは、口縁部が欠損しているものが多いことなど資料的に制約があり、明確なことは言えないが、口径と底径の差が2：1になるものが多いと考えられる。本城跡出土の土師質土器では、同町内に所在する芳原城跡や南国市の田村遺跡群で出土している手づくねによる皿が認められない点などに相違点をみることができる。これらのことか

ら、本城跡の土師質土器は、中村市の栗本城跡や中村城跡で出土した土師質土器と共に通じた様相を感じることができ、今後土佐における15~16世紀における土器様相を考えるうえにとって重要な視点となるであろう。その他の器種では、5・7の鍋・釜が出土している。釜は土師質のものでは稀な出土である。

輸入陶磁器は、青磁、染付、白磁が出土している。青磁で口縁部に雷文帯を有する13は、上田編年のC-IIとC-IIIの中間的な文様構成をもつものであり、染付碗の16は、大橋編年III類に文⁽⁴⁾と文⁽⁵⁾の間に位置するものである。⁽⁶⁾備前焼は、IV~V期編年される播鉢・甕が出土している。以上のことから本城跡出土の遺物は、15世紀後半から16世紀中葉までとして大きく促えることができよう。

- 註1 春野町教育委員会 「吉良城跡Ⅰ」 1985年
春野町教育委員会 「吉良城跡Ⅱ」 1986年
春野町教育委員会 「吉良城跡Ⅲ」 1987年
- 2 高知県教育委員会 「芳原城跡」 1984年
- 3 高知県教育委員会 「田村遺跡群」 1986年
- 4 中村市教育委員会 「栗本城跡」 1985年
- 5 中村市教育委員会 「中村城跡」 1985年
- 6 上田秀夫 「14~16世紀の青磁碗の分類」
〔『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年〕
- 7 大橋康二 「15・16世紀における日本出土の青花碗に関する編年試案(1)」
〔『白水』No.8 白水会 1981年〕
- 8 間壁忠彦・藤子 「備前焼研究ノート(1)~(3)」
〔『倉敷考古館研究集報』1・2・5 1986年〕



第111図 出土遺物実測図

V ま　と　め

今回の調査において、土居ノ谷地区から柱穴及びピット等が検出され、掘立柱建物跡の一部が確認された。また、大谷地区からは土師質土器及び青磁片が出土し、遺構は検出されなかつもの、発掘区の周辺に形成されている可能性がうかがわれた。

調査で得られた所見と今後の問題点にふれてまとめとしたい。

土居ノ谷地区

- (1) 第3次調査で設定したAトレンチの東側に発掘区を設けてMトレンチとし、調査を実施した結果、⁽¹⁾第6層褐色粘礫土及び第7層黒褐色土から掘り込まれた柱穴及びピットを検出することができた。
- (2) 検出された柱穴及びピットは、出土遺物（土師質土器・青磁・白磁・染付）の内容から、戦国時代に形成された遺構であり、掘立柱建物跡の一部と考えられるものである。また、出土遺物は15世紀後半～16世紀中葉に属するものと判断され、検出遺構についてもこの間に形成された可能性が強い。
- (3) 第3次調査のAトレンチからは、石垣遺構及び柱穴・礎石状の版石が検出されており、今回検出された柱穴及びピットと同時期に形成された遺構であるとみられることから、Mトレンチで検出された遺構と関連するものであると考えられる。
- (4) 発掘区の周辺は、果樹園（柿畠）として利用されており、面的な調査は困難であったが、第3次調査のAトレンチで検出された遺構の広がりを確認することができた。また、戦国時代の遺構形成面は第6層褐色粘礫土及び第7層黒褐色土上であることが判明した。
- (5) 遺構の検出状態からみて、発掘区の東側にかけてさらに広範囲に遺構が形成されていることが推測される。
- (6) 出土遺物のなかで輸入陶磁器類は染付の出土点数が青磁に比べて多かった。また、土師質土器については、全体的にロクロ成形によるものがあり、画一性が強い内容であった。

大谷地区

- (1) 薬師堂の北側及び第3次調査の1～4トレンチ南側において、A～Dの4ヶ所の発掘区を設定して調査を実施した。調査の結果、遺構は検出されなかつものの、B及びCトレンチの第3層暗褐色粘礫土中から土師質土器及び青磁片等の戦国時代に属する遺物が出土した。
- (2) 第3次調査の1トレンチからは、茶臼が出土しており、今回の調査で出土した青磁片等と併せて、中世の遺物が発掘区周辺に散布していることが確認されたことから、周辺に遺構が形成されていることが考えられる。

なお、B及びCトレンチの第3層は流入土と考えられるものであり、土層の堆積状態から

みれば、遺構のは薬師堂の北側周辺にかけて存在していることが推測される。

今回の発掘調査を含めて、吉良城跡については4次にわたる調査が実施された。初年度の第1次調査（昭和59年度）では、城跡の詰部（北嶺）が調査対象となり、また、第2次調査以降は主として城跡山下の土居及び土居周辺を対象として、中世城跡とそれをとりまく屋敷跡等の居住地についての総合的な検討作業が進められてきた。

これまでの調査結果からは、城跡の詰部から掘立柱建物跡の一部及び礎石状の割石、櫛歯状のピット等が検出されて詰部における建物跡の所在が明らかとなつたほか、城跡山下の「土居ノ谷」⁽²⁾地区において城主屋敷跡の一部と考えられる遺構が検出されたのに加え、「大谷」地区では土師質土器・青磁及び茶臼等の戦国時代に属する遺物が出土して、周辺に屋敷跡等の存在が推測された。⁽³⁾特に、第3・4次調査において「土居ノ谷」地区から検出された石垣遺構、柱穴、石組造構等はこれまで文献によって推測されてきた「土居」の所在地を明確にするものであり、城跡と土居との位置関係を具体的に確認することができた。

山城及び土居を含めた発掘調査としては、吉良城跡の調査は本県において初めての試みでもあり、これまでの調査成果及び本年度の調査成果を踏まえて、今後の吉良城跡の保存管理の方策を具体化してゆくことが必要である。また、城跡の所在する丘陵部に比べて、開発行為の進展の激しい平地部に所在する土居屋敷等の所在地については、土居ノ地区で遺構が確認された例からみても、早急な資料把握と適切な保存策の検討が望まれる。このため、春野町教育委員会では昭和63年度において、町指定史跡としての今後の保存方策について具体的に方針を策定してゆく計画である。

註(1)『吉良城跡Ⅲ』 春野町教育委員会 1987年

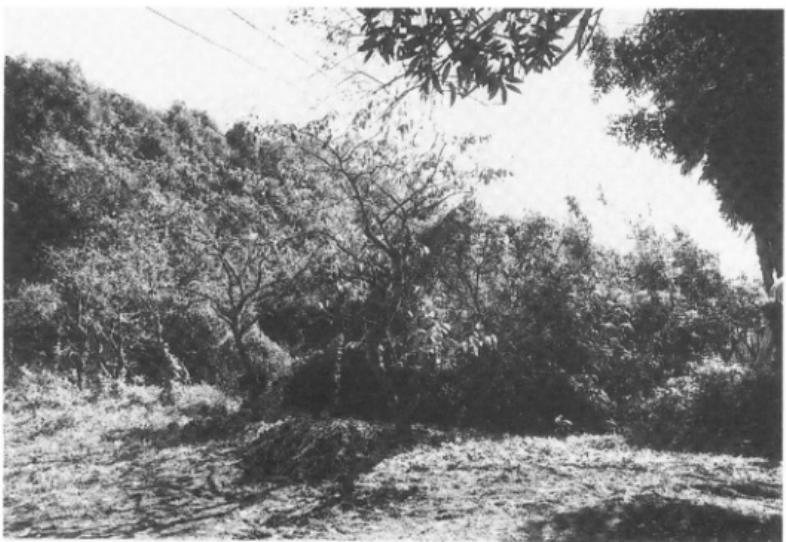
(2)『吉良城跡Ⅰ』 春野町教育委員会 1985年

(3) 註(1)と同じ

図 版



大谷地区遠景（北東から）



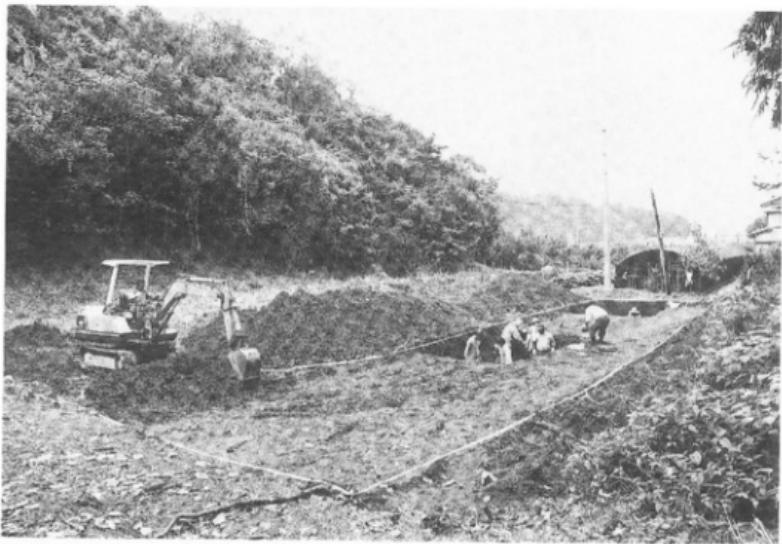
大谷地区調査地近景（調査前・北から）



大谷地区調査地 伐採作業風景（北から）



同 上



大谷地区 トレンチ設定状況（A～C トレンチ北から）



同 上（南東から）



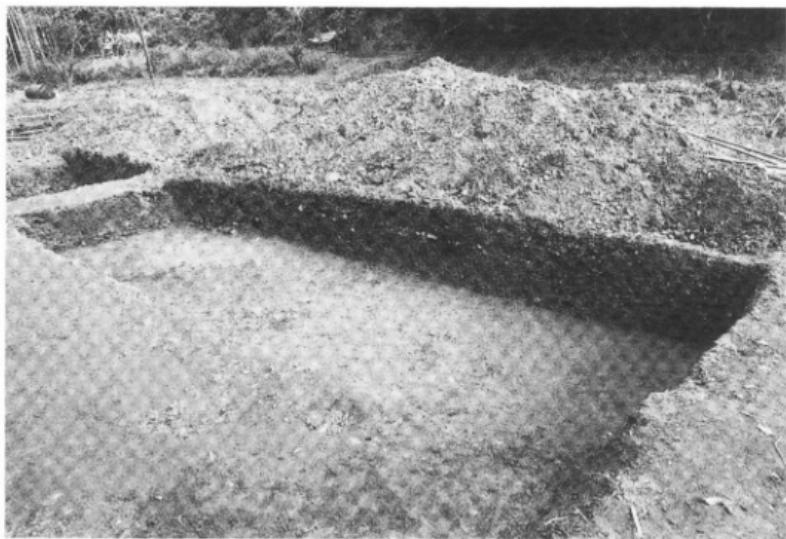
大谷地区 トレンチ設定状況 (D トレンチ 西から)



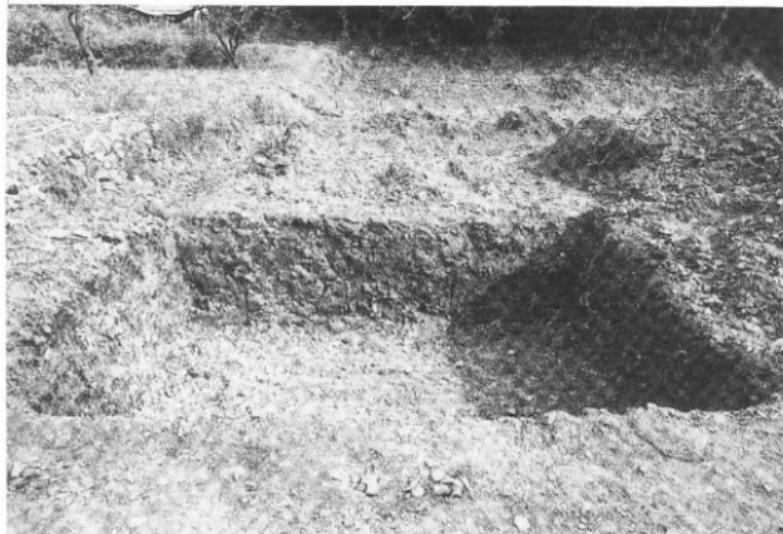
同 上



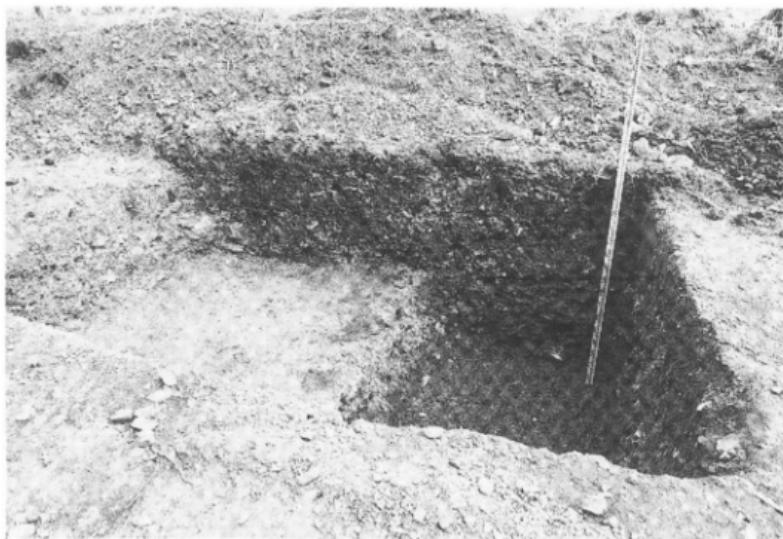
大谷地区 トレンチ設定状況 (C トレンチ 北東から)



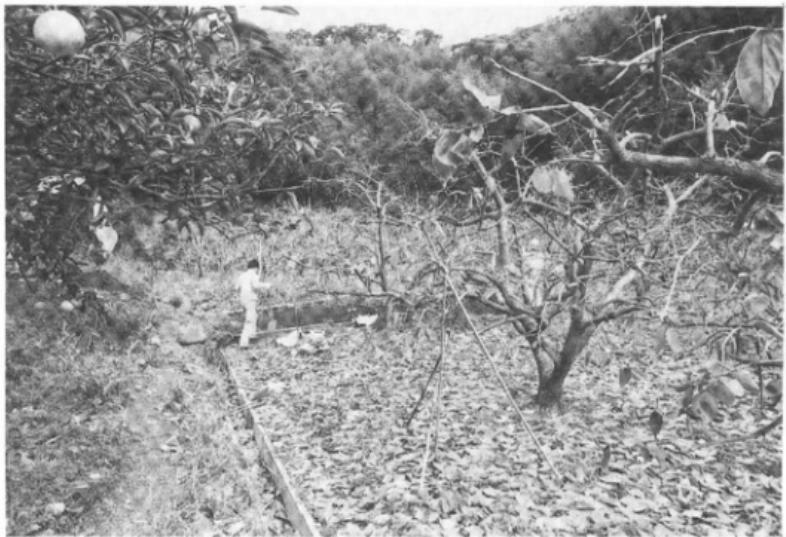
同 上 (南西から)



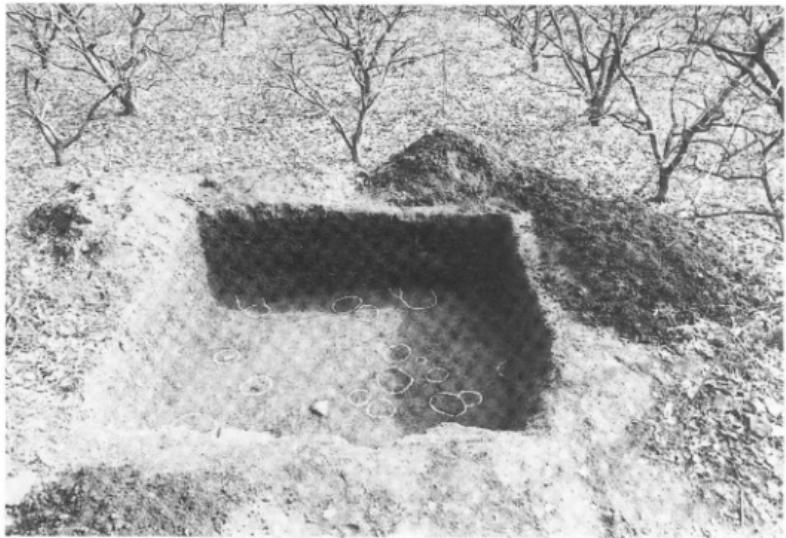
大谷地区 トレンチ設定状況（A トレンチ 西から）



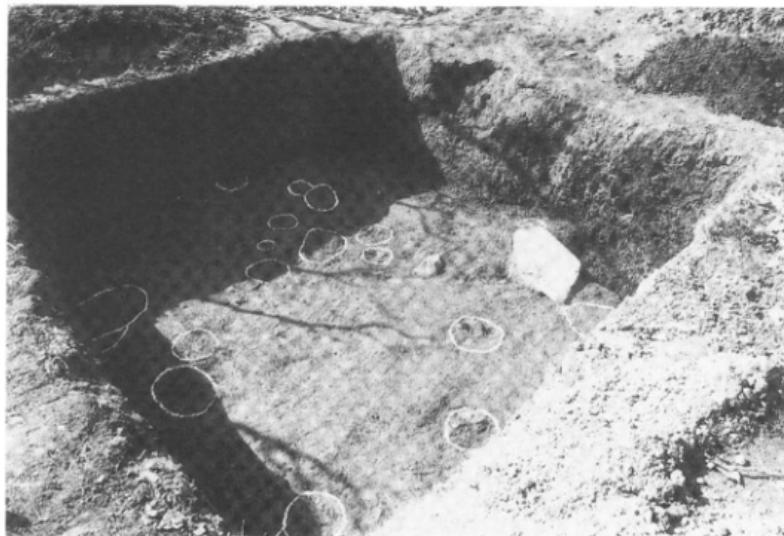
同 上（B トレンチ 西から）



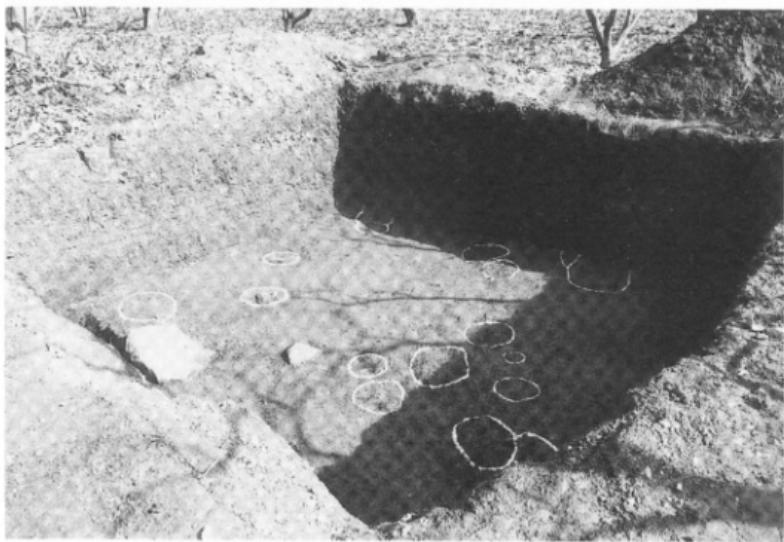
土居ノ谷地区 トレンチ設定状況（Mトレンチ 南から）



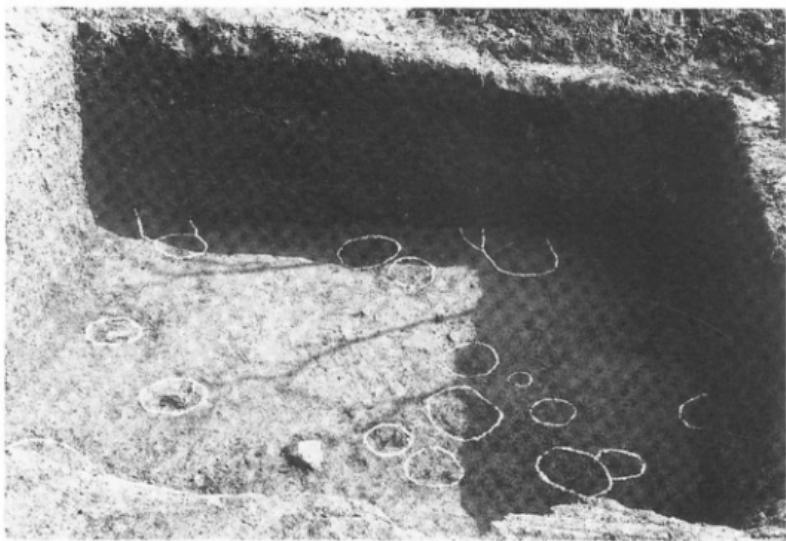
土居ノ谷地区 遺構検出状態（西から）



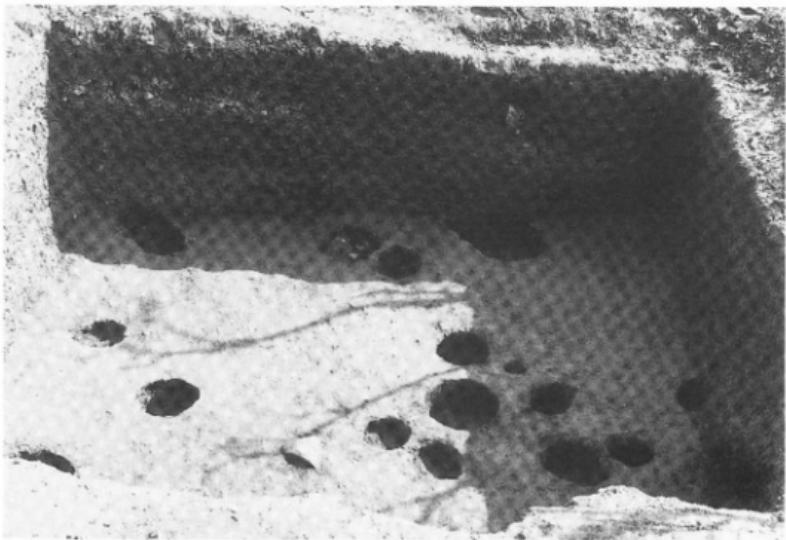
Mトレンチ遺構検出状態（北東から）



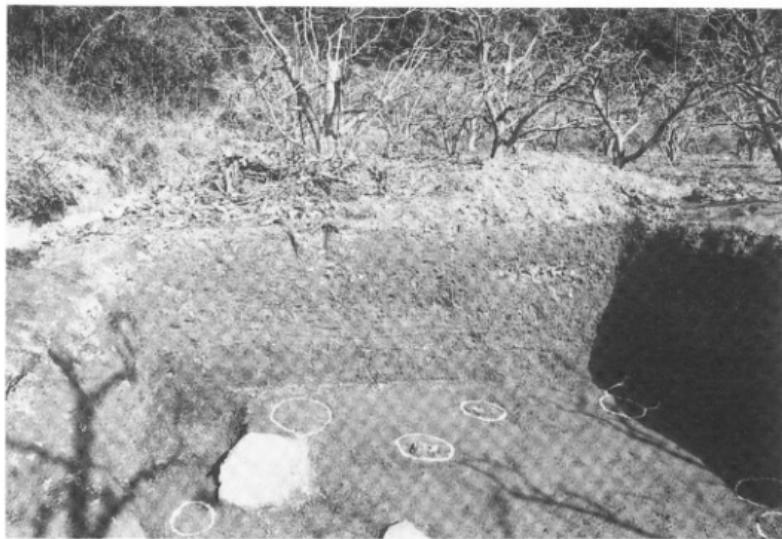
同上（南西から）



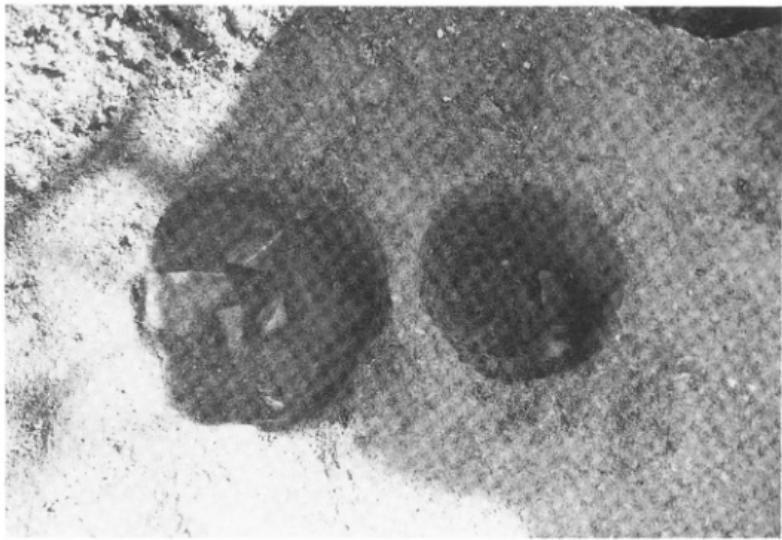
M トレンチ遺構検出状態（西から）



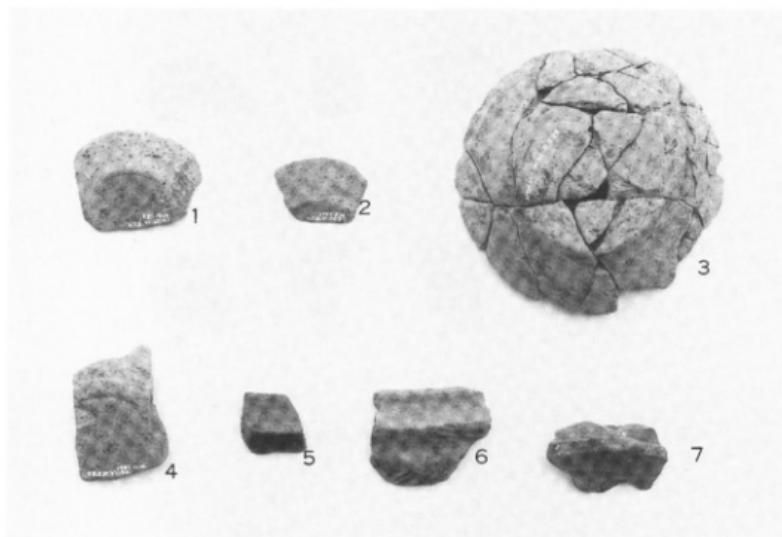
完掘状態（西から）



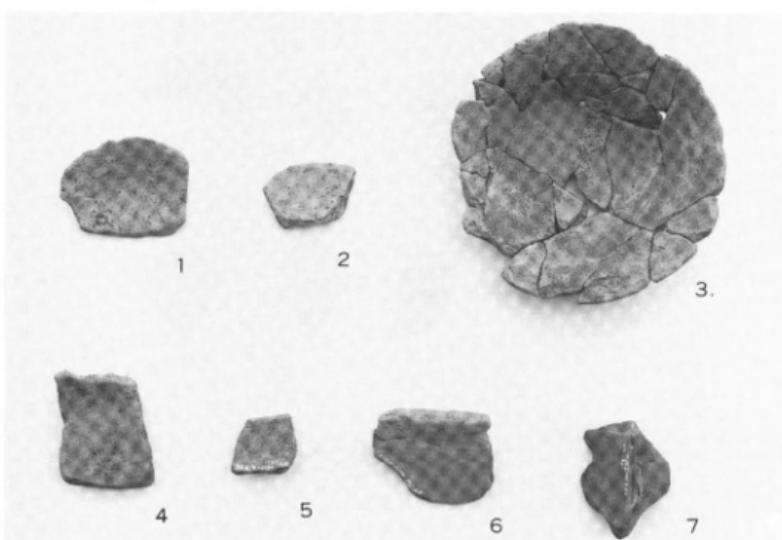
トレンチ土層堆積状態（南から）



トレンチ東側遺構検出状態（北西から）



外面

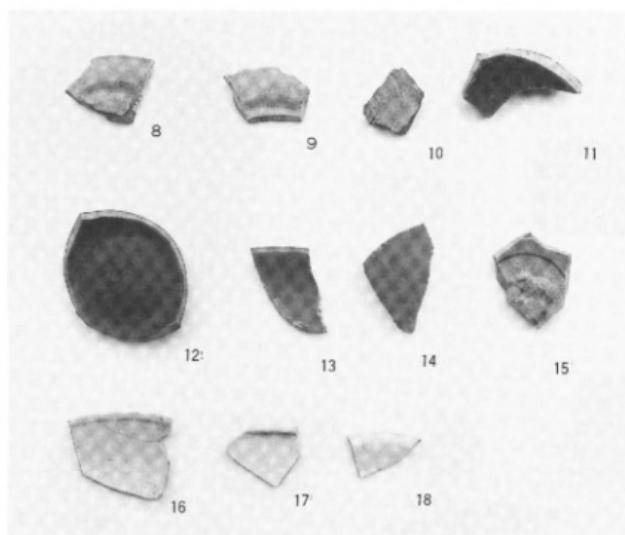


出 土 遺 物 (土師質土器)

内面

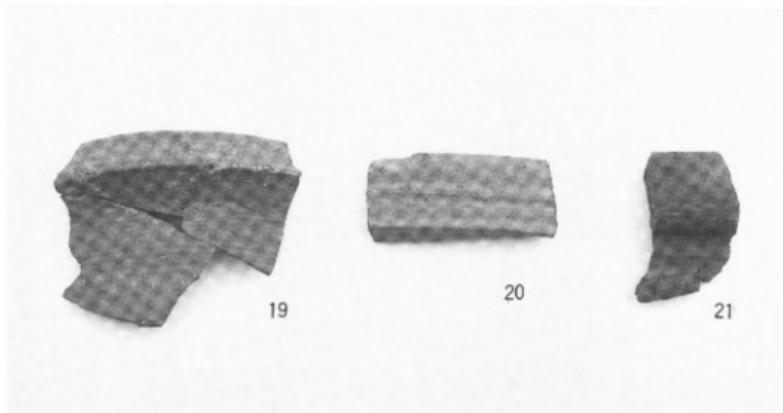


外面

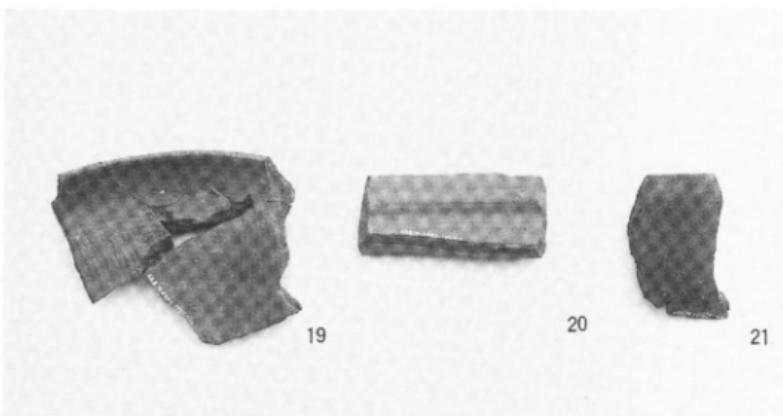


出土遺物 (青磁・白磁・染付)

外面



外面



国産陶器（備前焼）

内面